文壇ゴシップと詰将棋

三浦 卓

新聞や週刊誌にとって、現在でも将棋は重要なコンテンツのひとつである。芸能ゴシップも同様であるが、かつては文壇ゴシップもまた然りであった。例えば1922（大正11）年に創刊された『サンデー毎日』にも将棋や文壇ゴシップが早い時期から見られる。ここで紹介するのは、その『サンデー毎日』1926（大正15）年10月10日号に掲載された、堤寒三漫作「文壇詰将棋新題」というその両者の融合ともいえる記事である。

堤寒三はこの時期の『サンデー毎日』に度々文壇を戯画化した漫画をよせているが、本記事も詰将棋の配された9×9の盤の上部に「菊池王将」、右に「中村飛将」、左に「佐藤角将」の似顔絵が描かれた漫画が大きな存在感を放っている。本文では、冒頭から「本局文盤の大局を見ますに、菊池王方は新進川端、横光、菅、石濱の歩が中心となつて防御に備へ…」と作家たちが駒に喩えられていて、「攻方」もまた「渡仏昇天の龍と成つた中村飛車」「合評会あたりの連絡を示す佐藤角将」「猪突的不同調同人の香車を従へて」などと同様である。まだ歩にすぎない新感覚派同人を従えた菊池寛王に、『文芸春秋』への対抗の拠点として『新潮』のコラム欄の名を冠した『不同調』を主催した中村武羅夫と、原稿料をめぐる論争で菊池寛と対抗的な見解を示していた佐藤春夫が飛車角として攻め込むといった形で、文壇のある部分の構図が詰将棋として表現されている。指し手も「詰方△三三龍。（本局の主眼点はこの一手です。龍がフランスへの生命の洗濯に出掛る前、犠牲的に玉砕主義に出たら）」のように、いちいち文壇ゴシップ的文脈で意味付けられている。実際の詰め手にこういった意味を持たせ、しかも本当に詰む、という知的遊戯となっているのである。

将棋を比喩として用いる『小説神髄』以来の伝統と言えるのかはともかく、当時の文壇がどのように把握されていたのかが見えると同時に、文壇（ゴシップ）と将棋のファン層の重なりも感じさせる貴重な資料ではあるだろう。本当に詰んでいるのかは、詰将棋がてんで駄目な私には真偽が確かめられない故、国会図書館などで記事を探して各自確認されたい。

［志學館大学］